

# 「今日、この島に私がいます」 故郷の愛媛を舞台にした映像表現



専修大学ネットワーク情報学部 講師  
**杉田 このみ**  
SUGITA Konomi

## プロフィール

映像作家。  
2000年から故郷である愛媛を舞台にした映像表現を続ける。  
2007年武蔵野美術大学院博士課程単位取得退学。  
2014年千葉商科大学政策情報学部助教、専任講師を経て2019年より現職。

## 第二の母校

秋学期がはじまった。千葉商科大学の3号館前では、学園祭に向けたカラオケ大会がはじまっているだろうか。昼休みに響く学生たちの歌声、秋の風物詩が懐かしい。

私はちょうど5年前の2014年9月に政策情報学部の助教（翌年、専任講師）として着任した。それから4年間、充実した日々を送ることができた。この場を借りて、感謝の意を表したい。

緑豊かな美しいキャンパスで、個性豊かで優しく賢明な先生方、仕事が丁寧迅速的確な職員の皆様、いつもすみずみまで綺麗にしてくれる清掃スタッフの皆様、おいしい食事をつくってくれる食堂スタッフの皆様、年中夜通し警備してくださっている守衛所の皆様、CUCサポートの皆様、生協の皆様を支えられ、そして素直で伸び盛りの学生たちと共に過ごし学べたことは、私自身にとって生涯の宝となった。

1号館のスタジオを活用し、創造的な授業に関われたこと、「学長プロジェクト4(環境・エネルギー)」に

関わり、メガソーラーや、学生たちの活動を撮影できたこと、7号館2階の談話室や、本館3階ファカルティ（教職員食堂）で偶然居合わせた先生たちと楽しく談笑したこと、ゼミの時間に授業が終わっても制作に打ち込んだこと、それらが思い出深い。

商大を第二の母校と呼ばせてもらいたい。

貴学のさらなる発展と、学生たちの学業成就、成長をご祈念申し上げます。

## 第一の母校 今野先生のことば

さて、私の第一の母校は、武蔵野美術大学である。1998年に入学のため、故郷の愛媛から上京した。武蔵野美術大学は、東京都の西部、小平市にある。西武国分寺線の鷹の台駅を降り、15分ほど歩く。近隣には江戸時代に築かれた玉川上水があり、閑静な郊外といった趣だ。

入試の日にはじめてこの場所を訪れた。2月初旬の曇り空の下、玉川上水端の道を歩いた。寒々しい枯れ

木を見上げながら「あ、太宰治が自殺した玉川上水か」と気づき、第一希望の大学に不合格になっていた私はさらに陰鬱な気持ちになった。しかし、その曇り空に弱々しく伸びている枝を見て「この枝も春になると緑いっぱいになるんだろうな」と思うと、めきめきとわきあがる生命力を感じた。そうすると、太宰はなぜこの生命力溢れる場所で自殺したのか、不思議になってきた。ここが新緑でまぶしくなる頃、私はここで学生生活を送っているのかもしれない。足取りは軽くなった。私は、玉川上水で見た枯れ木を、実技試験の絵に描き、合格することができた。それから9年間、新緑の光景に励まされながら、映像制作に明け暮れた。

ここで出会った生涯の師が、今野勉教授(当時)である。今野先生は、1959年にラジオ東京(現、TBS)に入社し、1970年、日本初の映像制作会社テレビマンユニオンを創設した。そして83歳の現在も、最前線で活躍するテレビディレクターだ。テレビの草創期から、テレビにしかできない表現とは何かと模索し、素晴らしい番組を世に送り出している。

2000年の大学3年生のとき、今野先生から「学生映画が秀でるポイントはロケ地だ」という指導があった。「それなら海も山も夕日も美しい愛媛だろう」と即座に考えた。なかでも、愛媛にある離島、陸月島の光景は特別に思い出された。

陸月島は、松山市郊外にある高浜港からフェリーに乗り、30分ほどのところにある。周囲13キロ、人口200人程度(現在)の小さな島だ。ここには父方の本家があり、いまでも数人の親戚が住んでいる。私はここで生まれ育ったわけではないが、幼いころ、夏休みをここで過ごすことが、最も幸福な時間だった。きょうだいや大勢のいとこたちと、海水浴場で遊び、釣った魚や、伯母たちがつくった料理を食べ、墓参りで送り火を焚き、灯籠流しを見送り、盆踊りをして、花火をし、満天の星空を見上げて、蚊帳のなかでゴロ寝する。いまとなっては映画のような夏の光景だった。



陸月島 南側にある港を中心に、左右に集落が広がる

## 陸月島での作品制作

そこで指導を受けた大学3年生のとき、その陸月島を舞台に短編映画「なれらい」(2000年、18分)を制作した。東京で挫折した青年が、故郷の風景と友人に励まされ夢を取り戻す物語。この制作では、自分が書いた脚本のセリフを撮り終えることに精一杯で、演出もろくにできなかった。しかし、ラストシーンに撮影した夕日がとても美しく、撮影終了後も、みんなと眺めていた。この感動が、愛媛で映画をつくり続ける原点となった。

その後、大学院に進学し、修了制作「こぎいでな」(2003年、60分)も陸月島を舞台にした。愛媛で映画をつくり続け、故郷の魅力だけではなく、課題も感じるようになった。過疎化により、地域の文化や産業が衰退していく現状に気づいた。未来につながるために、何を考え、行動すべきなのか、それがテーマとなった。このとき、自分が学んできたことで、できることは映画をつくることだった。自分と映画に何ができるか、それを賭けて取り組んだ。

島に暮らす14歳の少女が、少年式(昔の元服にならった愛媛の風習)を迎え、将来について考えるという物語にし、実際に島に暮らすひとが主人公を演じた。東京から従兄がカメラを持ってやってきて、架橋の問題に揺れる島の現状を映し出すという架空の設定をし、盆踊りやミカン栽培の様子など、実際の出来事や風景を交えた「ドキュメンタリードラマ」という手

法で映画にした。

完成後、島の公民館で上映会を行った。島民の9割にあたる人たちが見てくれ、笑いあり涙ありの上映会となった。上映後、当時13歳の主人公を演じたはとこは、みんなの前で「陸月島がこんなに美しい場所だって、映画で知りました。これからは陸月のためにがんばります」と涙ながらに話し、みんなも涙を流していた。私も「映画は、人々の感動を呼び、何かを変えられるかもしれない」という期待と達成感を得た。

その後も、映画制作を通してさまざまな経験と思索を重ね、2011年から、三たび陸月島を舞台に「今日、この島に私があります」（以下、「しまわたし」というプロジェクトに取り組んでいる。これは、陸月島に数日間滞在し「やりたいことをやり続けている状態」を作品とする試みだ。訪ねてくる友人たちを「出演者」と位置づけ、私は撮りたいと思ったときだけ、カメラを向ける。島に滞在する数週間を、第1話、第2話…と、連続した物語として捉え、今年2019年で第9話となった。以下、この「しまわたし」までの経緯をもう少し書く。

## 自主映画の限界

今野先生の指導を受け、2000年から愛媛を舞台に自主映画制作を続けてきた。「なれらい」のあと、正岡子規と夏目漱石の若き日の友情を描いた映画「石に漱がれホトトギス」（2001年、30分）や、父と母の出会いの映画「私が生まれた日」（2002年、30分）、愛媛の戦争遺跡を舞台にした映画「日-hitsuki-月」（2007年、60分）など10本ほど制作し、愛媛各地で上映会も30回以上行った。

故郷を舞台に映画をつくることは、自分の生きてきた場所を見つめ、自分はどのように生きてきたか、他者とどのように関わってきたのか、そして故郷に対して自分は何ができるか、それを頻繁に自問することだった。その問いに自分なりに向き合いながら答えを出していく。この過程そのものが、自分にとってかけがえのない経験と学びと充実感となった。

しかし、2009年頃、自主映画制作に限界を感じた。それは「映画」という表現方法の限界だった。自主映

画は、出演者やスタッフの善意のボランティアで成り立っていることが多い。私もいわゆる「顎足代」（主にスタッフへの交通費と食費）は資金調達できたが、それ以上のことはできなかった。だから出演者に「明日、アルバイトがあるから撮影に来られない」と言われると、残されたスケジュールなどを考慮し、数年かけて書いた脚本を書き換えなければならない。さらに、撮影機材の不調や天候不順などにも左右される。そしてまた書き換え。当然物語の整合性がとれなくなってくるので、また書き換え。そうして、脚本を書き上げたときのイメージと、実際に撮影できる映像が、波の漂いのように近寄ったり離れたりする。私にとって映画制作とは、なんとかしてその波間の中間点をとるために、トラブル処理をこなすことだと感じるようになった。

トラブル処理自体は苦ではない。むしろさまざまな出来事と出会いがあり、やりがいもあり、楽しかった。しかし、つらかったのは「自分の表現したいことと、実際の作品が、周囲の都合により乖離してくること」だった。そこで「自分の表現したいこと、自分の表現とは何か」との根本的な問いに立ち戻った。

そもそも「映画」とは、劇場（現在は、インターネットの動画サイトも含む）で公開されるためにパッケージ化されたコンテンツとするならば、私は「映画」にこだわる必要はない。むしろ「映画」をつくることに固執してしまい、たかだか60分程度の映像データに押し込むために、都合のよい起承転結の物語を求め、故郷に向き合うこともせず、バツサリ切り取っていたのではないか。「故郷に向き合う」とは何か、自分の「おもい」がもっと「かたち」となる表現とは何か、そのことを考えるようになった。

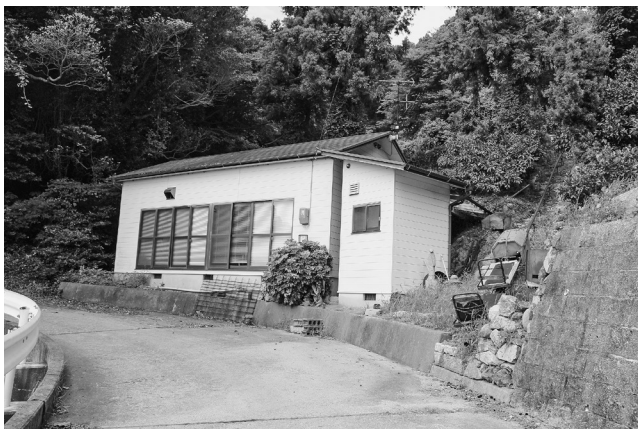
## 故郷に向き合う 自分の「おもい」を「かたち」に

「しまわたし」を着想したころ、私は一橋大学で任期付の助手として勤めていた。数年の任期が終わったあとの進路は確定していない。愛媛に戻って作家活動が続けるのか、研究の道に残れるのか、それとも違う道があるのか、悩み迷っていた。

2003年に「こぎいでな」を制作し「映画は地域の課題を解決できるかもしれない」と手応えを感じたものの、この考えは甘かった。あれから十数年経ったいま、陸月島の過疎はより深刻だ。発着するフェリーの本数も削減され、海水浴場もなくなり、小中学校も閉校となった。崩れかけた家屋や、雑草の繁茂する畑が目立つようになった。

映画のようだった光景が、そのような寂しいものに変わっていくのには、目を背けたくなくなった。自分にとってかけがえのない思い出をつくってくれた陸月島。陸月島には、人を幸せにする力があつた。いま、その力を失いつつある。その陸月島に対して、「いま」の「私」ができることは、かろうじて、夏の数日間「ここにいる」ということだけだった。「陸月島は自分にとって大事な場所だ」という自分の「おもい」を、「ここにいる」という「かたち」にし「今日、この島に私があります」というメッセージを送る。それが「しまわたし」である。

改めて考えると、陸月島はこの試みにもってこいだ。島には、30年前、大工の父が、親戚の農地を借り建てた小さな家があり、それを拠点にできた。数人の親戚も住んでいるし、島民は、みんな私を知っている。カメラを持ち、多少奇異なことをしても「また映画をつくっているんだろう」とおおらかに見ている。



30年前に建てた小さな家。  
囲炉裏があり、そこで魚や肉を焼いて食べた。  
少し小高い場所にあり、陸月島が一望できた。

## 「しまわたし」8年間の物語



2013年 7人の高校生ほか出演者たちと

今振り返ってみると、2011年～15年を第一部、それ以降を第二部の物語として捉えることができる。

「しまわたし」を始めた2011年、私は島で過ごす楽しさを伝えたくて、SNSなどを使い、積極的に情報発信した。かつて私たちがそうしていたように、出演者たちとひたすら遊んだ。海水浴、スイカ割り、釣り、バーベキュー、ピザづくり、コスプレ、花火、星空観察、肝試し、鬼ごっこ、猫探し…人が人を呼び、出演者は年々増えていった。5年間で、のべ100人を超える出演者数となった。

なかでも、知人が顧問を務めているある高校の美術部員7人の物語は印象深い。陸月島に、制服姿の高校生が7人も歩いている光景は数十年ぶりだろう。それだけでも祭りのような晴れがましさがあつた。また彼らが帰りのフェリーに乗るとき、瞬間的に大雨が降り、去っていったら晴れ上がった。港の水たまりに青空が映り込み、彼らの物語のエンディングのようだった。

また年数を重ねることによって、気づくこともあつた。それは、普段の生活にはない「待ち」の時間に対話が生まれることだ。フェリーが着くまでの時間、魚が釣れるまでの時間、火が起るまでの時間、潮が満ちるまでの時間…。そうした時間に、出演者たちは何となくお互いの話をはじめた。また、ふらりとやって来る私の親戚たちは、出演者たちに、流暢な陸月弁で「おんしゃーら、このなあーんもない島に、なあんしにきたんいうんでえ？(あなたたち、この何もない島に何しに来たの?)」と聞き、昔の島の様子を語って

くれた。そこには、自分も知らないこともあった。出演者を通して、知らなかった陸月の光景をたくさん見たり、聞いたりすることができた。カメラが回ってなくても、出演者それぞれのなかに、物語が展開し、思い出としての映像がつくられている、という感触があった。

2016年に娘が生まれたので、以前のように大勢の出演者と思いきり遊ぶ、ということは難しくなった。そのような変化から、2016年からは、第二部といえる。娘のペースに合わせて、海を眺めたり、ご飯を食べたり、島の行事に参加したり、親戚らと交流したりした。

2016年、生後三ヶ月の娘は泣きっぱなしで、1泊で島を離れた。翌2017年、フェリーを気に入る、汽笛が聞こえるたび、窓辺へ走り寄り「おふね、ばいばい」と手を振っていた。2018年、島に到着したとたん、娘の表情はぱっと明るくなり、親戚にももらったお下がりのおもちゃで水遊びをしたり、私の父が釣ってきた鯛を美味しそうに食べたり、とても楽しんでた。そうした娘の姿の向こう側に、島の景色が妙によく見えるようになった。

夜明け前のかすかな鳥の鳴き声が聞こえ始めると、ミカン畑に向かう軽トラの音がする。この時期は「ようほう」（「防除」がなまった言い方？）といって、防虫剤を散布するのだと聞いた。暑くなる前に仕事を済ませるのだろう。そして太陽が昇ると一斉に蝉が鳴き始める。定刻通りのフェリーの汽笛。毎日2回、潮の満ち引きがある。それに合わせて釣り人は波止へ移動する。長年続いてきた島の光景が、ようやく見えてきたのだ。

## 仮装の盆踊り

陸月島では、8月15日に盆踊りが行われる。仮装して踊るといって全国的にめずらしい風習がある。櫓にいる2名の口説き（歌い手）が、太鼓のリズムに合わせて唄う。仮装した人は、紙に何に扮しているかを書いて、背中に貼る。実行委員が出来映えを審査し順位が決まる。その年の話題の人や、王様、ひょっとこ、お化けなど、子どもからお年寄りまで、さまざまな仮装がされる。

それまで見たり撮影したりはしたが自分で仮装はしなかった。「しまわたし」を着想したとき、この独創的な文化を、自ら体験してみようと思った。

「しまわたし」の出演者たちと、アニメのキャラクターなどに仮装して毎年参加した。盆踊りの参加者は年々減っていき、2014年に口説きは録音に変わった。仮装する人も数人になった。それでも1位は取れない。毎年必ず1位を獲る年配の女性がいたからだ。

2017年に、熱心に仮装を続けている女性にインタビューする事ができた。「小さいころから踊りが好きでね。太鼓の音を聞くと、もうじっとしとれんのよ。衣装は一ヶ月前から手作りしよったんよ。誰がどんな仮装するんか、見に行くのも楽しみじゃったわい」そして、昔作ったものだと、フラガールの衣装を3着くれた。その衣装は、白いビニールテープでできていて、帽子と腕輪、胸当てもあり、腰箕はふわりと仕上げられ、南国風に工夫されていた。

翌2018年、豪雨被害で開催が危ぶまれたが、盆踊りは行われた。娘とフラガールの仮装をし、背中の紙に「がんばろう！陸月」と書いて踊った。その女性の姿はなく、私はついに1位になった。翌日女性を訪ねると、足を痛めて参加できなかったと言う。1位を取った話しをすると、喜んでくれた。



2018年 盆踊りをする娘。  
私のフラガールの衣装を奪い取り踊っていた。

その年、仮装の準備をしているとき、娘はそわそわしながら私を見上げていた。その目の輝きを見て、衣装をくれた女性の幼い日々が想像できた。装飾作りを見に行ったり、踊りのきれいな人に振りを教わったり、次第に島が華やいでいく様子は、ハレの日に向かう高

場感となっただろう。この盆踊りは、準備期間が大事だったのだ。撮影者の立場では気づかなかった。

仮装の風習は、いつから始まったのか、誰に聞いても「昔からやねえ」と言うだけで、よくわからない。しかし「しまわたし」を契機に、他にない風習には、身体を通じて受け継がれる経験のあり方が結晶しているのだ、ということに気づくことができた。

まだ2歳の娘には、盆踊りのことは記憶に残っていないだろう。しかし、おそらく100年以上ある陸月島のお盆の光景を、娘のなかにつくることができた。「しまわたし」を通じて、経験を掘り起こし、未来につなげたい。そこにこの試みの意味がある。

### これからの「しまわたし」

陸月島に父が建てた小さな家は、2018年7月西日本豪雨の土砂崩れで全壊した。私は8月に様子を見に行った。家の跡には、戻された屋根だけが残っていた。見たとき、なんだか滑稽なものと感じた。自然の脅威を感じるということもなかった。こんな風に壊れるとは思ってなかったが、いずれなくなるとは思っていた。



2018年7月、西日本豪雨で全壊した小さな家。  
撮影日は8月。農道に屋根などが流れ落ちていたが戻されていた。2019年には、がれきは撤去されていた。

これまでも、陸月島にあった自分の好きなものが、たくさんなくなった。木材で作られた船着き場、海水浴場、飛び込み台、砂浜、海苔養殖のいかだ、花火を売っていた駄菓子屋、小学校と中学校、盆踊りの生演奏、満天の星空、夕日が美しく見える段々畑、整備された白い農道、親戚のミカン畑、本家の伯父さん…これらはいつの間にか消えていたが、この家だけは、終わりを見せてくれた。これから5年、10年経過すると、ほかにいろいろなものが消えているだろう。崩壊した家を見て、「しまわたし」は、このような喪失に立ち合い続けることだと確信した。

「しまわたし」で撮りためた膨大な映像はデータ保存してある。それらを編集し、失われた情景や出来事を振り返って偲ぶような、ノスタルジーにひたる映像作品としてまとめることもできるだろう。

しかし、その映像もいつかは見ることができなくなる。映像データを、長い年月残すためには、専門的な技術と設備が必要で、費用もかさむ。日々膨大な映像データが生成されているが、数十年先に残るのは、わずかだろう。

そのことを十分に承知して、なお「撮りたい」と思う私の気持ちはどこから湧いてくるのだろう。喪失と立ち合うことだと覚悟しながら、なお楽しく、魅力を再発見できる陸月島という場所は、私に何をを見せてくれようとしているのか。そのことに真剣に向き合うことで、故郷への「おもい」を「かたち」にする表現になっていくだろう。